がん難民を生まない日本のがん医療への提言

3大治療法と緩和医療、そして統合医療を加えた 3位一体の「がん医療」

長尾クリニック（尼崎市）
院長 長尾和宏

ながお・かずひろ
昭和59年東京医大卒、大阪大学第二内科および関連病院勤務を経て平成7年、尼崎市で開業。現在、複数医師体制で年中無休の外来診療と在宅療養支援診療所として活動。医学博士・日本消化器内視鏡学会指導医、専門医・日本消化器病学会専門医・日本内科学会認定医・日本病態栄養学会評議員・労働衛生コンサルタント

私は五十歳の町医者です。勤務医時代は多くの主に消化器領域のがん患者さんと接してきました。そして現在は、町医者としてがんの発見・診断を行うとともに、在宅医療の現場で様々ながん患者さんやご家族と語り合い、訪問看護師さん、ケアマネさんに助けられながら試行錯誤する毎日です。気がつけばご自宅で最期を迎えた患者さんは約300人になりました。

「がん再発難民が生まれる背景」

人はいつか死ぬ、と悟ったつもりでいてもいざ自分ががんの宣告を受けると誰でも慌てるものです。しかし考えてみればがんは死因の1位。最もありふれた病気であり、3人に1人ががんで死ぬことは現実です。

がんにはご承知のように、手術、化学療法（抗がん剤）、放射線療法の3大治療法がありますが、もはやすべての適応がないと判断されて専門医から見放された患者さんは、免疫療法、健康食品などの代替療法などをさ迷うことになります。しかし、そこそこ動けるのでまだホスピスや在宅医療に身を委ねたくはない、最後まで絶対に諦めたくない、と願う患者さんは、藁をもつかむ思いで必ず病院以外の門を叩いて回ります。がん医療と緩和医療の狭間。治療（キュア）と療養（ケア）の狭間に落ち込んでさ迷う患者さんを、がん再発難民と呼ぶのでしょうか。

「がん医療はEBMとNBMの協働で」

がん治療は科学的根拠に基づいた医療、EBM（Evidence Based Medicine）を重視して行われますが、決して東洋医学や在宅医療に代表される経験に基づく医療、NBM（Narrative Based Medicine）を否定するものではないと思います。「がん」は発生臓器によって様々な個性がありますが、患者さんによっても個性があり、さらに病期によっても性格をガラっと変える、厄介者であり曲者です。さらに病気だけでなく、患者さんの歴史、生き方、そして患者さんのご家族の背景を考えると、がん医療は実に多様であり、世界に一つとして同じ物語はありません。がん医療はまさにオーダーメイド医療（NBM）そのものであることは、在宅医療の現場に身を置く町医者ですら毎日痛感させられます。がん医療には、まさにEBMとNBMの協働と統合が求められています。

「さらに統合医療を加えた3位一体のがん医療へ」

従来、免疫療法、温熱療法、健康食品などの治療法を科学的に検証してきた代替医療学会は2008年から新たに統合医療学会として再編され前進しました。これらの代替医療とされる治療法の中には、いまだ科学的根拠が充分でないもの、経験的に有益である可能性や将来性有望であると評価されつつある治療法も沢山含まれています。しかし中には悪徳業者が混じる可能性もあり、まさに玉石混同で厳密な科学的なチェックが必須です。日本でもようやく国立大学（現在は独立行政法人）にも代替医療の講座ができてきましたが、欧米では従来から代替医療の役割は高く評価され、代替医療のみを研究する大学も存在するくらいです。

今、求められるべきは、膨大ながんに関する情報の集約化と科学的な評価を公開することです。いわゆる「本気でいいとこ取りのがん医療」を目指す姿勢ではないでしょうか。エビデンスに裏づけられた3大治療法と緩和医療、そしてまだエビデンスが十分ではないが可能性を秘めた統合医療を加えた3位一体の「がん医療」、さらには地域や施設で温かく包みこむ「がんケア」の両輪が、国民から強く期待されていると思います。そのためには、がん専門家と地域のかかりつけ医や在宅医、そして患者さんや市民がしっかりと情報共有して連携することが今後の課題です。

「「この指とまれ」に寄せられる国民の期待」

そんな思いのある日、がん医学文献のベテラン翻訳者であり、みずからもがん患者である藤野邦夫氏が、求められるままにがん患者さんの相談に走り回っているという報道を目にしました。御縁とは恐ろしいもの。彼の存在を知って間もなく実際にお会いする機会が訪れました。底抜けに明るく親切なうえに情報量が格段に豊富な藤野氏を見て、多くの人から慕われる理由がすぐにわかりました。世の常として裏を勘ぐる人がいるかもしれませんが、藤野氏は何の見返りも利害も後先も考えず求められるままに純粋なボランティアとして全国を飛び回っておられます。その姿に心から感動いたしました。

藤野氏自身は、おそらく誰かが名づけた「がん難民コーデネーター」なんていう役割が不要となる時代の到来を願っておられることでしょう。そんな彼を応援したい、もっと情報交換したいという医療関係者や市民が多く出てくるのは当然です。本冊子「この指とまれ」もその趣旨の元に集った方々が、がんに関する有益な情報を提供するものです。藤野氏という稀有な市民が「真に患者のためになるがん医療を考えよう」という神輿の上に乗った形で誕生しました。「この指とまれ」というささやかな試みがやがて大きな波動となり、国民の利益となることを大いに期待しています。